

棚

田

ライステラス

第40号 2006.1.31
(季刊・年4回発行)

発行／全国棚田(千枚田)連絡協議会

編集／ふるきゃらネットワーク

〒169-0073 東京都新宿区百人町1-23-29-202

TEL 03-5389-9937 / FAX 03-5389-0078

<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

全国棚田(千枚田)連絡協議会



愛知県新城市立連谷小学校6年児童作品「足で代かき」

棚田地域への「アイタター」者たち

里山での暮らしを求めて夫婦で移住。今では、大山千枚田保存会理事

オーナー制度が移住の決め手

「東京に住んでいたとき、夫婦で田舎暮らしをしたいと思って、いろいろ探していたんです。そんなとき、1999年のことです。大山千枚田で第1回目の棚田オーナーの募集があり、それが決め手となりました。具体的には、夫が探していたのですが、夫自身、映像の仕事で、千葉県の広報映画を撮らせてもらったことがあり、そのとき県内を歩いて、鴨川市についていなあと思っていたようなんですね。

そして、夫婦2人とも田舎暮らしだけでなく、農業もしたかったんです。でも、2人ともぜんぜん農業の経験がなくて、オーナー制度であれば、農業も一から教えてもらえる!とあって……。子どもがいないこともあり、もともと、わたしは福島・会津若松の出身、夫は岡山県出身でしたが、2人とも縛られる「家」というようなものはなかったのです。仕事もそれぞれ、フリー（自営）でしたから身軽だったといえます。

「オーナー制度」のほかに、鴨川市に移住を決めた理由は、一つはわたしたちは東京での仕事が残っていましたから、東京と日帰りできる地域という「交通の良さ」でした。さらに、鴨川市には大きな総合病院があるんです。こうした「医療の良さ」も決め手となりました。「オーナー制度」「交通機関」「医療機関」の3つが、鴨川への移住を決めさせました。

2000年、オーナーになった時点で、鴨川市に移住しました。最初の2年は千枚田の近くに空き家がなく、海の近くに住んでいましたが、今は、大山千枚田のすぐ近くです。

そして、オーナーも3年続けた後、近くの棚田を3畝借りることができ、すべて手作業で米づくりをしています。主人が中心になってやってくれています。東京の友人たちも来てくれるんですよ。

移住して体調が良くなった

「確かに農業は初めての経験ですけど、イヤになることはないですね。まだまだ好奇心いっぱいなんです。主人は土に触れている生活が性に合っているみたいです。暇さえあれば、土に触れ、森に入っています。わたしも里山の環境がとても好きです。



長村順子さん(46歳) ダンサー・「長村順子モダンバレエスタジオ」主宰/NPO法人大山千枚田保存会理事
長村雅文さん(48歳) 映像ディレクター/NPO法人大山千枚田保存会会員

実は、東京にいたとき、からだの具合をずいぶん悪くしていました。また、ダンスの舞台作品を発表する

など、創作活動も多くしていました。新しいものを生み出そうとすると、どうしても都会のなかでは病んだもの、病的なものとなってしまうんです。それはしんどかった……。踊りもやめてしまおうと、とても弱っていたのです。けれど、こちらへ来て、生きものに触れ、緑に囲まれ、生き返らせていただいたんです。からだも活性化してきて、そのことに自分

で驚きました。今、体調はとても良いんですよ。植物やヘビやカエル、小動物に囲まれ、そのなかにいることで、自分が変わっていくという発見がありました。これは、ここへ来て、最も良かった点だと思います」

2002年全国棚田サミットの棚田ダンスを振り付け

「からだを回復してきたら、『踊りたいなあ』って、再び踊る元気が湧いてきました。そんなとき、ちょうど鴨川市で2002年「第8回全国棚田サミット」があり、そこで披露する「里山版の『よさこい踊り』的なものをつくってみたいか」と大山千枚田保存会の理事長から声がかかったんです。地域に奉納できるようなダンスをつくりたいと思っていましたから、願ってもないお話でした。今では、踊りのメンバーも増え、新しく3曲目も振り付けし、これらを「里舞」と名付けて、市のイベントや農業祭などでも披露しています。

こうしたことを機に、大山千枚田保存会(NPO法人)の理事として、最初は広報を担当し、今は企画を担当させてもらっています。鴨川市は、大山千枚田保存会があり、イターナー者がかかりやすい地域だと思えますね。イターナーには、



真ん中写真：左から4番目が長村順子さん。子どもたちステージ写真は、2005年大山千枚田収穫祭のときのもの

みなさん、それぞれのケースがあると思うのですが、一番大切なことは、「前向き」になることじゃないでしょうか。「〜できない」ではなく、その土地に行ったら、「何ができるか」を前向きに考えることで、新しい楽しみを発見していくことができます。そして、人も含めて、その土地のことをよく知ること。都会と違い、10軒のなかに1軒が新しく入ってくるって、とても大きな出来事です。ですから、受け入れてくれることを感謝しながら、土地のことをよく知り、どうやって遊ばせてもらうか。これを考えて、地域のみんなどかかわっていくって、とても素敵なことなんです」

(長村順子さん談)

子どものアトピーを機に移住。この地で終の棲家を探して

娘のアトピーを治したい

「松崎町に移住したのは1998年です。東京に住んでいる時からよく遊びに来ていました。若い頃からシーカヤック（カヌーの一種）が趣味ということも手伝ってこの辺りの海に来ていたんです。来るたびに自然あふれる松崎の魅力に引き込まれ、毎年のように訪れていました。

海・山・川とすべてあるこの地に住む決意を決めたのは、娘のかかっていた皮膚科医の「良い環境に移ることができればアトピーは改善される」という実話はたくさんあるんですよ」という一言でした。とくに海水と温泉もアトピーには有効だと太鼓判を押して下さったので、どうにかこちらで暮らす事はできないものかと訪れるたびにそういう気持ちが強くなっていきました。娘のアトピーは新生児の頃から、それは見ているだけで涙が出そうなくらい痛々しいものでした。当時、薬の副作用がいろいろといわれていて、何とか薬を使わずに治すことはできないかとそればかり考えていました。しかし、そうはいっても症状が改善しない限り、薬を止めることなどできません。小さい頃からずっと薬を塗り続けていて、痒くてグッスリ眠れたことがないほど重傷でした。それで自然と縁のあるこの地で何とかアトピーを治したいと移住を決意したのです。そう決意をしたものの、仕事が

なければ暮らしてはいけません。東京では石塚亮事務所として、雑誌や書籍などのデザインを手がけてきましたが、松崎町で仕事を開拓してやってみようという覚悟はありました。できないという覚悟はありました。移住して7年経った今でも、東京からの依頼が主になっています。

東京まではここから3〜4時間程かかります。ですから、打ち合わせ等なかなか行くことができません。少ずつ仕事が減ってきているのが現状です。こうしたことは、移住する前から当然予測してはいましたが、娘の健康にはかえられませんでした。

7年が過ぎ、娘は、今ではアトピーと外見ではわからないほど回復しています。耳の下や膝の裏など多少症状はありますが、薬が手放せないといった状況ではありません。あのまま東京にいたらどうなっていたのか考えると本当に良い選択をしたと自負しています。娘もこの環境に感謝しています」

棚田、そして農業との出会い

「今、住んでいる場所は松崎町の中でも町中で、役場や銀行など生活するのにとても便利な所です。ですが、せっかく田舎に住むので



石塚 亮さん(52歳) デザイナー(「クリエイティブハウス・ワズ」)
石塚 淳子さん(48歳) 主婦
真央さん(13歳) 中学2年生

すから、もつと山の中の一軒家のような所で暮らしたいとずっと探し続けているのですが、なかなか理想的な家に巡り会えないでいます。ここは海からすぐに山になる地形なので、土地も少なく空き家もあまりない地域なのです。

移住して半年ぐら経った頃のことです。ちょうど、松崎町の石

部の棚田を復興するということが、県の整備事業のPRパンフレットの製作依頼を受けたのが縁で、地域の代表の方々と出会うことができ、2001年から棚田を2段分2枚お借りして、米作りをすることができるようになりました。これは、東京にいるときからの家族の夢で願いは通じるものだ感謝して

ます。米作りも一から教えていただきました。面積は5畝弱です。農業は生まれてはじめての経験でした。僕は、出身は仙台ですが、両親とも公務員という環境で育ったものですから、とにかく何もかもが新鮮でした。

昨年秋で5度目の収穫を迎えるまでになりました。ここは全部手作りで、畦塗りも家内と2人でやっています。まだまだなかなか上手くいかず、毎年1年生です。それから3年ほどして、町中

も「田んぼをやる人がいなくて困っている。先祖代々の田んぼを潤らすと周りに迷惑をかけるので、やってくれないか」という話が来るようになって、今は町の平地の田んぼも2反作っています。こちらは機械を使つての米作りです。

農機具は世話をしてくれる方がいて、いらなくなつたものを調達してきてくれるので、耕耘機、田植機、脱穀機など今ではひとつひとつ揃っています。

農業は昔から「結い」といって共同作業のつながりがあるからでしょう。みなさん面倒見がいいんです。水路の掃除も田んぼをやっている人全部総出で集まって、水をそれぞれの田んぼに引けるようにするのですから、人間同士のつながりが強くなります」

この地域で終の棲家を見つけた

「お米は売るほど作っていませんが、

親戚や友人等に配って喜んでもらえるのが嬉しいです。なかなか時間がとれなくて収穫が遅れたり、無農薬なので草刈りが追いつかず周りに迷惑をかけてしまつたりといろいろ上手くはいきませんけれど、それから農機具の収納場所がないのも頭痛の種ですね。家の周りが農機具センターのようです。田んぼをやる米の収納も含め、納屋や倉庫の必要性が切実です。こうした場所に困らないような住まいを見つけたと思っています。

棚田では、健康に良いといわれている黒米を作っています。平地の田んぼとは違って水漏れなど水の管理が大変ですが、水は本当にきれいです。田んぼにはたくさん生きものが育つていてにぎやかです。棚田は景色といい、水といい風といい、気分が爽快になります。疲れて周りを見ると遠くに青い海が見え、ただただ川の音だけという感じで、その心地よさについてい長居をしてしまいます。

ここの環境は素晴らしい一言です。山が見えます。波の音も聞こえてきます。家の中に小さいカニが入って来ます。温泉も湧いています。ずっとこの地に住んでいる人には当たり前のことが、私にはまだまだ新鮮です。

ここに終の棲家を見つけないと常に夢見ています。田んぼもあるし、かけがえのない人とのつながりもできてきましたので……」

(石塚 亮さん談)

千枚田オーナーから移住者へ。今では、商工会事務局長に

オーナーの2期生だった

「私は、梶原町千枚田オーナー2期生なんです。1年目は抽選に外れて……。当時は、大阪市内の薬品会社に勤めるサラリーマンでした。住まいは、兵庫県川西市でしたが、平成4年2月、新聞に梶原町が千枚田オーナーを募集するという記事が出て、「これだ!!」と思いました。後から聞くと、初年度は約400件の問い合わせ、160件近い申し込みがあったそうで、同じような思いの人がたくさんいるんだな、抽選にも外れる訳やと思いました。稲作の経験はなかったのですが、昔から田舎に憧れがあった。これが応募の動機でした。そして翌年、晴れてオーナーとなり、通うようになってすぐに、移住したい、ここで暮らせたらいなうと思うようになりました。自然豊かな山里、空気も水も美味しく、地元の人々も人情豊かで、何やかや通ううちに自然と梶原に移り

住みたいと思うようになったのです。しかし現実はどうかと、当時は子どもも小さく、家のローンもあったし……。結局、実際に移住できたのは10年後の平成15年4月。長女も結婚し、長男も大学3年と卒業の目途もたち、親の責任もあと1年という時、会社で早期退職の募集があったんです。そこで、『今

がチャンス、これを逃すと二度とチャンスは来ない』と、一応、家内にも相談はしましたが、ほとんど、私の思いで決めてしまいました。今でも家内には無理を言っています。誤なと思っています。

今は、千枚田がある神在居集落の外れで、一軒家を借りています。夜、表に出るとご近所の明かりは一切見えません。一番近いお隣でも歩いて4〜5分かかります。これぞ、理想とする田舎暮らしです。そして、神在居の千枚田を少し借りて、米づくりもしています。オーナー制度も、今ではオーナーを受け入れる地元の担当農家という立場です。オーナー制度も14年も続けば、受け入れられる側も高齢化が進んで、

オーナーさんのお世話をするのもたいへんなんです。

元々、神在居集落は11軒の集落でも、オーナーから移住者になった家が3軒あります。私のところと1期生の田村さん、あともう1軒同じく1期生の入江さん。集落は14軒になったわけです。集落の平均年齢がぐつと下がりましたね」

商工会の事務局長に就いて

「移住してもうすぐ3年になります。そもそも田舎暮らしをしたい、田んぼがしたいとこっちに来たので、最初の半年は、基本的に田んぼや畑仕事だけで、あとはのんびりと過ごしていました。その後は、シルバー人材センターに登録して、草刈りや牛小屋の掃除、ミカンの受粉作業、大工仕事など都会では経験できない仕事をいろいろさせてもらいました。また、平成15年10月から昨年3月までは、知り合いの紹介で、郵便局でユーマイト(非常勤職員)として月のうち10日前後勤めていました。

そして、平成17年の4月から梶原町商工会職員です。これも友人の紹介で、商工会の事務局長として働かないかと声をかけてもらいました。候補者がたくさんいる中で、Iターンして数年の私に声を掛けてもらったのがうれしくて、また、仕事内容にも興味があったので受けることにしました。再びサラリーマン生活に逆戻りです。

責任ある仕事ですし、今、すごく仕事がおもしろいですね。商工会の通常業務以外に、国道拡幅工事に伴い発生する跡地利用など、地域活性化」といった大きな仕事もあります。1年契約で毎年更新の職ですから、いつまでできるかわかりませんが、町が変わりつつある時なので、何か力になればと思っています」

移住してストレスから解放

「移住して、心にゆとりができました。昔みたいに、カッカすることがなくなりましたね。ストレス要因が減ったのだと思います。昔から、田舎志向が強かったのは、都会の、煩雑さや環境がイヤだったせいもあります。人との結びつきもこっちは深く、強いでしょう。それが僕にはいいのかもしれないですね。もちろん、こっちの生活も忙しく、バタバタしていますが……。仕事のほかに春から秋は、田んぼに畑。冬は冬で今までの人生の整理、自分史をまとめたり、写真の整理をしたり、アナログレコードをCD化したり、家の雪下ろしをした……。雪下ろし? 南国土佐なのには? 梶原は別格。よく雪が降るんですよ。今年はずっと多く、庭先で1mを超えていました。

ただ、私はこちらに来てストレスが減りましたが、家内は反対にストレスがたまっているんじゃないかな。家内は、車の免許を持つていないこともあって、家から出る事が少なくなりました。こっちにも行けないでしょう。ここはほんとうの一軒家ですから、ストレスたまりますよ。

また、田舎暮らしだと、冠婚葬祭の手伝いや集落内の行事が多くて、とくに女性は、いろいろとつき合いです。しかも、3歳と1歳の孫がいますから、孫の顔も見たいだらうし……。けれど、今、私のがままにつき合わせさせて、ほんと、申し訳ないです。

農村地域へのIターンは、相当事前準備しておかないとイカンと思います。『住みたい』という思いだけで飛び込んだのでは無理ですよ。住まい、仕事もそうですが、地域の風習などを勉強しておかないとトラブルの元になります。自治体が間に入ってくるといいんですが、梶原でも何人か飛び込んできて、諦めて出て行くケースがありましたからね。夢と現実の違いということですよ。

ですから、オーナー制度は、Iターンを希望する者には、良い制度ですよ。もちろん、オーナー制度があったおかげで、住みたいと思うようになった訳ですけど……。それだけ、梶原は魅力のある良いところなんですよ」

(加藤英二さん談)



加藤英二さん(53歳) 梶原町商工会事務局長
加藤正美さん(53歳) 主婦

オーナー10年。そして移住。子育て真っ盛りで、悩みも

定住を機に子どもを授かって

授かって

「梼原との出会いは、千枚田オーナーでした。1992年、梼原で千枚田オーナー制度がはじまるのことで、主人が新聞で見、いつの間にか申し込んでいたんです。当時、わたしたちは大阪市に住んでおり、通うこと自体むずかしく、「遊び半分でやると迷惑がかかる」と反対しました。

私は長崎出身で、田舎の叔父の田んぼを手伝うなど、たいへんさもわかっていたが、主人はサラーマン家庭育ちで、農地も知らないし、山のなかで暮らしたことがない人。でも、どうしてもやりたいというので、まあ、だめだったら1年で終わればいいと思い、梼原へ通いはじめました。

田村紀代美さん(43歳) 梼原町役場臨時職員
田村 俊夫さん(45歳) ディレクター・まちづくりコーディネーター(広告制作会社「ワークショップ」代表)
涼晟くん(4歳)

初年度、月1回通うなか、1年も経たないうちに、主人が「梼原に住みたい」と言い出したんです。地元の

おじちゃんおばちゃんたちとふれあいたい、つながりが強くなって、移住したいと思うようになっていったようなんです。おそらく、ふるさとをつくりたいと思っていたんじゃないかしら。

愛媛県松山市にいた義父母も梼原への移住は賛成でした。わたしたちは、オーナー3年目に大阪から松山に移っていましたから、梼原には義父母も一緒によく来ていたんです。みんなで梼原に移住しての同居も考えていました。けれど結局、義父は、移住したわたしたちを見ることなく亡くなり、2年後、義母も他界しました。

移住は、主人に押し切られたかたちですね。2000年、『年齢40歳まで』としている町の若者定住促進事業をぎりぎり使うことができるという時期でした。その支援金を使って住宅を神在居の千枚田のなかに建てました。今、その家を月3万円で借り受けているかたちで、10年後、住宅を町に返すか、残りのお金を払って買い取るか選択する制度なのです。

当時、わたしたちには子どもがなく、わたしは「大人だけだったら、何とかかな」と思って移住に賛成しました。ところが、家を建てる最中、子どもを授かったのです。結婚して16年、ずっと子どもが欲しかったのですが、ついに授かった子どもでした。

梼原での子育て、そして教育

そして教育

「2001年、長男・涼晟が誕生しました。いまはもう幼稚園児。すっかり梼原っ子で、わたしたちは土佐弁を話さないのに、しっかりと「しちゅう」(して、の意)など、土佐弁丸出しです。

梼原で子育てをするなか、都市とは違う不便さを実感しますね。子育て支援のサービスがほとんどないんです。行政も高齢化対策には敏感ですが、少子化対策とは言葉ばかり……。気軽に集まれる児童公園もなく……。

みなさん、近くにおじいちゃんおばあちゃんがいまです。ここは親戚のつながりが強いものですから、助け合いがあり、預け先もあるんです。でも、イターンは頼る親戚などがないので、自分たちで何か子育てサポートサークルを立ち上げるしかないなあ、というところまで来ています。

涼晟も小さなうちは、預かってくださる近所のおばあちゃんおじいちゃんがいまです。でも、4歳。『走り回るようになって追いつけない』というので、もう預けられないんです。田舎は、子どもが小さいうちは環境も良く、自然に触れられて、最高の環境です。けれど、子育て支援の仕組みがないのは、頭を痛めています。子ども自体が

級生は30人もいないですもの。そして今、不安なのが、将来の子どもの教育です。子どもが少ないですから、競争心が育たなくて……。今後、本人がどういう進路を希望するかわかりませんが、本人の希望を聞き、考えようと思っています」

主人は松山市と

行ったり来たり

「千枚田は、オーナーのときと同じで10aをつくっています。農業を使わずにやるので、田んぼの草取りなど、たいへん。主に、主人がしているのですが、主人は仕事の関係で愛媛の松山市の事務所に引ったり来たりしていますので、わたしが、子どもをおぶって草取りしたり、寝ている合間を見て作業したりもしました。

主人の仕事は、広告制作などディレクター業務ですが、今も仕事の中心は松山です。梼原の自宅から松山の事務所までは片道、車で1〜2時間程かかります。地元からの仕事も少しずつ増えています。松山と行き来する生活がもう3〜4年続いていて、体力的にも心配で、将来的にはもっとこちらでの仕事を増やしたいですね。

一方で、主人は地元の「梼原の明日を考える会」というまちづくりの会に入って、地域づくりにも参画しています。こうしたこともやりたかったことの一つのよう

仕事だけに限らず、さまざまなつながりができています。

わたしも、以前は主人の仕事を手伝い、松山と行き来していましたが、涼晟が保育園や幼稚園に通うようになると、そうもいきません。今は昨年9月から、役場の臨時職員ですが、この仕事も今年の3月までなので、それ以降は、先ほどお話しした子育てサークルを立ち上げなきゃならないなあ……、と思っています。

今ちょうど、梼原病院の医者として梼原にイターンしたお母さんと一緒に、子育てと教育に関するアンケートを町内で取ったところなんです。子どもの一時保育や学童保育、また、塾も梼原にはないので、受験を目指す子どもたち向けの学習の場も一緒に用意していかなければならないでしょうね。

イターンのお母さんはしがらみがないこともあり、周りからは「やってほしい」という期待は大きいですね。でも、その一方で頼る人がいない分、孤独感があります。ほかの地域からお嫁に来た人も、友だちがいなくてさみしいと言います。ストレスを抱える人も多いでしょうね。わたしは、子どもがいて助かっていますよ。イターンならではの子育ての悩みも大きいですが、逆に子どものおかげで、地域とかかわり、地域の人となりがりをつくりつけていますものね」

(田村紀代美さん談)

定年後、妻の郷里の雪国へ移住。スローライフを實踐して

吉田 良一

豪雪地帯の棚田で

私の住む上越市安塚区須川という地は、市の中心部から東南へ直線距離で20km、車で50分余の山間地にあります。

標高1129mの菱ヶ岳を主峰とする関田山脈で長野県と境をなし、住居地帯はその菱ヶ岳の山麓標高400m内外の高原地帯に集落をつくっています。

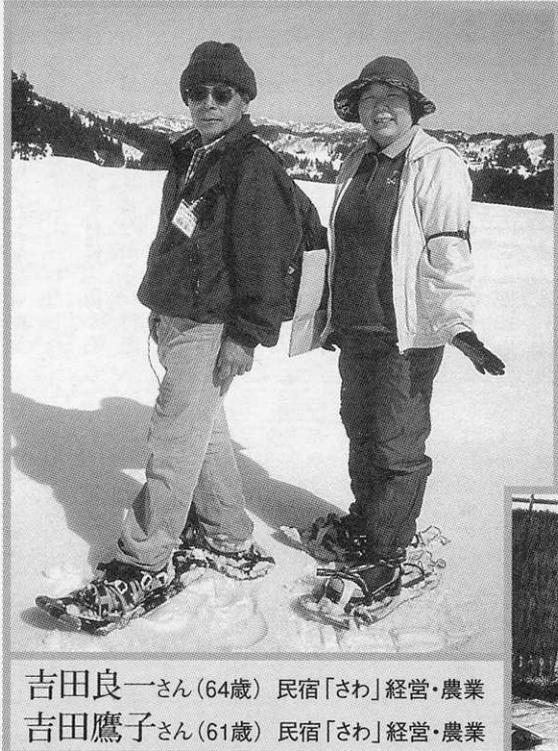
冬期は4mを超える積雪に埋もれる豪雪地で、日常の生活は雪処理に追われる日々が多くなりますが、近くにキュービッドパレイという名の、ゴンドラ1基、リフト4本、滑降距離4kmというスケールのスキー場と、県下第一を誇る大きな浴場を持つ天然温泉があって、地元民は優遇利用することができるので、ストレス解消に大いに役立っています。

さらに、雪を貯めて夏の冷房や冷蔵施設に利用したり、道路両脇にできた雪壁に1m間隔で穴を穿ち、そこにキャンドルを灯す。区内全域を5万本のキャンドルで飾り、各集落では工夫を凝らした雪像や茶屋を設けて、訪れた人達をもてなす。毎年2月の最終土曜日に行われるこの行事には、全区民が参加して、雪の一夜を幻想的な世界に変えて楽しめます。

かくして苦楽と共に冬をやり過ごし、待望の春を迎えます。何となく、この地の最大の魅力は春

の山菜でしょう。雪に晒された露のとうや山ウドの旨さは格別なものがあります。こごみ、ぜんまい、タラの芽、コシアブラ、次々と萌え出す山の幸の恩恵にあやかるとに忙しく、嬉しい悲鳴をあげるのになります。

雨上がりの晴れた早朝、一面の緑に浮かぶ残雪の菱ヶ岳の神秘的な美しさを目にする事ができるの、この地に住んでいればこそこのことと思います。重要な産業は



吉田良一さん(64歳) 民宿「さわ」経営・農業
吉田鷹子さん(61歳) 民宿「さわ」経営・農業



ていますが、我が地に於いては、その昔は笠に隠れる程、小さな険しい段状の連なりだったようです。我が家の棚田も、今は2枚で合わせて1反歩程になっている

農業で、山裾から山腹に至る棚田での稲作が、この地の暮らしを支えています。

石川県輪島の千枚田の逸話で、田の数を数えて999枚に至るが、最後の1枚が脱ぎ捨てた我が身の糞に隠れていた程の小さな田の集まりだったとの喩えとして知られ

定年後を機に家内の郷里へ

11月中旬から雪が降り始め、4月中頃にならないと地表が見えない雪深い山里に移り住むようにな

ったのは、今から10年程前のことでした。それよりさらに5年前の1992年、それまでの私は東京でパートの物流を担う会社で勤続26年、50歳。現場管理職としてパブルの最盛期を仕事一途に、心身共に激しい消耗の日々を送っていました。

住まいを埼玉県に構え、朝早くに家を出て深夜に帰宅する、家族を巻き込んだ日常を当然のように受け入れていましたが、5年後に定年を控えたこの頃から爾後の人生をいかに生きるべきかを模索し始めていました。漠然と第2の人生は田舎で過ごすという思いはありました。とはいえ、生まれも育ちも東京の私には田舎の縁戚もなく、家内の郷里の当地は冬期の暮らしの困難さを思えば、全く当初視野にありませんでした。

その家内の郷里でスキー場建設計画が進んでいるとの知らせがあり、家内の実家はそのスキー場から程近い国道沿いの恵まれた立地にあるので、道路除雪を中心とした生活環境の大幅な改善が予想されました。そこで、勧める人もあって、家を建て替えて、民宿営業の許可を得ました。スキー場オープンと共に営業を開始し、この頃は家内と家内の両親の3人で運営に当たりました。やがて、5年を経て55歳で退職し、私自身も当地に移り住んで、民宿経営に本格的に取り組むことになりました。

スローライフを實踐して

元々田舎暮らしを望んだ理由が、晴耕雨読のスローライフを目指したもので、幸い田畑それぞれ3反歩程の耕地もあり、実践のための条件には恵まれていたと思います。耕作は、初めから有機・無農薬栽培で行っています。

田は8枚が4ヶ所に散在し、いずれも年間を通じて湛水状態にしてあり、刈った稲は、ハサに架けて天日乾燥しています。どの田も近くに沢を控えて水の出し入れに不自由さはないのですが、田の生き物との共生を願う私の拘りからのやり方です。

昨年の稲刈りで面白い場面に出会しました。私は、家内と2人で手刈りをしている。お隣さんは、バインダーで、さらに先隣はコンバインでと3軒が隣り合わせで稲刈り文明史を展開することになりました。棚田には手作業が似合うと強がっていますが、今のところ、3反歩が限界で、願わくばいつまでも、これまでのやり方を続けたいと思います。

民宿運営の方でも2年前、政府の規制緩和政策を受けて、どぶろくの製造認可を得ました。意外な人気で順調な売れ行きです。思いも寄らなかつた雪国での暮らしが、住んでみれば次々と新しい展開があり、今は充実した日々を過ごしています。

坂折棚田の状況

坂折棚田保存会 鈴木 直

さかおり

平成15年秋に当地で全国棚田サミットを開いて、はや3年目となり、今では各地から、カメラ愛好者、絵画メンバー、俳人クラブそしてファミリーと、多くの皆さんが坂折棚田の石積み景観、澄みきった空気、癒しの場を求めて訪れる昨今です。

ここ坂折も少子化・高齢化が進み、農家の担い手の減少で今の状況では荒廃化は免れません。保存会として何らかの打開策・解決策を模索し、全国の先駆的棚田保存会が取り組んでおられるオーナー制度を導入すべく、当市行政の農業振興課の担当者に相談、全国の資料を取り寄せて頂き発足への準備を進めていました。

平成17年4月初め、名古屋の米間屋(株)ハラキンさん、市農業振興課職員、JA職員と名古屋JC(青年会議所)の自然の恵み体験学習委員会委員長、副委員長の5名が坂折棚田へ来られて、ハラキン社長が急遽、5月に坂折棚田で企業の社員研修を行うから協力してほしいとの話。我々も願ったり叶ったりで、早速、対応することになりました。

「人づくりは会社の力なり」のキャッチフレーズで、米作りを通じた企業と農家のコラボレーション。以降、ハラキンの管理部長さ

んと細部にわたって連絡を取り合い、5月14日(土)に名古屋の2社(建設会社、鋼材会社)が研修田植えをされることになりました。

当日は絶好の田植え日和となり、1社が8aの田に子供や家族も含めて31名、もう1社が5aの田に同じく18名、保存会が4名出て田植え指導。泥の中で寝そべる子、オタマジャクシや沢ガニ等に夢中になる子、また植える人も太植えする人、1本ずつ植える人、苗の間隔の広い人、狭い人、蛇行植えする人など様々で、個性に富んだ田植えでした。

田植えが終わったあと、集落の公民館で五平餅を焼いて参加者に食べさせながら、五平餅研究者で市の歴史学者の安藤先生に五平餅談義を依頼し、大変な好評で、郷土の味覚を楽しみました。秋には稲刈り体験もされ、自分で植え、刈り取った棚田米を持ち帰り自給自足米として使われるとのこと。我々保存会としてもオーナー制度の代替活動として今後も取り組んで行きたいと期待しております。

また、名古屋JCですが、ハラキン社長(JCのOB)の紹介で6月12日に名古屋の子供の自然体験学習として坂折棚田で田植え。名古屋の子供40名、地元15名、大人を含めて約80名に3aの圃場を用

意。棚田広場では水槽を2つ用意し、一方には坂折川の魚(アマゴ、シロハヨ、ムツバエ、アブラハエ)約200匹を、もう片方には沢ガニ、カエル、オタマジャクシ、ヤゴ、イモリ、カメ、タイコウチ等を観察用に入れていたら、子供達は田植えよりも水槽に気をとられ、イモリ等の水棲昆虫や動物と帰るまで戯れていました。

帰りのバスの中では同伴の父兄からも「すばらしい景観の里山、棚田で体験できて感激した」という声があったと聞き、我々も喜びと達成感で快い汗をかいた一日でした。

7月17日には田の草取りに来るとファックスが入りました。賑やかな1日になるでしょう。また秋には自分達が植えた苗が撿(か)に穂(むぎ)た田んぼで喚声(わんせう)がびびくでしょう。毎年違った場所で行ったイベントを行っていたが、ここ坂折棚田で毎年恒例としようという名古屋JC執行部の話でした。

企業研修でのハラキン社長の言葉、「この取り組みは、我々の会社ハラキンもよし、参画企業もよし、坂折棚田保存会もよし、これ三方両得で皆んなよし、こんな良い事他になし」。植え終わった坂折棚田の青田にもフォロワー風が吹いております。(2005年7月記)

お便りテラス

棚田を棚田として守る意味とは？
ドイツの事例に学ぶ

昨秋、ドイツの農業環境施策を視察する機会がありました。農業環境施策とは、環境に優しい農業を行う代わりに農家を支援する仕組みのことで、「環境支払い」と言われることもあります。私が視察したノルトライン・ヴェストファール州では、KULAPというプログラムを1995年からスタートさせていて、州の農地の約20%で環境支払いを実施しています。

面白いなと思ったのは、通常の環境支払いの中でも、自然保護区域などが設定されている農地では、「契約自然保護」という厳しい規制を課すプログラムが実施されていることです。例えば、草地で卵を産む小鳥のために草刈りの時期を遅らせる代わりに、農家がお金を受け取るのです。農地が、生きものたちの棲む貴重な空間としてとらえられているのです。

また、南ドイツのザンクト・メルゲンという村の村長さんから「農地を出来るだけ森林にしたい」という話をお聞きしたのも印象深かったです。その理由は、4つあるとのことでした。まず、①農地が美しい景観をつくっていて、貴重な観光資源になっていること、そして、②農地が農地となって千年以上の歴史があり、文化遺産としても貴重な存在になっていること。また、③農地は、生きものたちが生息するところとしても大切な空間であるし、何より、④人間の住む環境として、暗い森よりも、開放的な農地の方がいいのだといつことなのです。

私が農水省で棚田保全を担当していたとき、「耕作放棄が進む棚田を守るよりも、いつそのこと、森林に戻したほうがいいんじゃないか」という人達に、どうしたら棚田の価値を分かってもらえるか悩んだことがあります。ドイツでは、日本よりも農地が農地としてあることの価値について、一般の人たちに深く認識されているのかもしれない。私が、日本の条件不利地対策である「中山間地域等直接支払制度」が、財政当局に認められるまで大変だったという話をする、逆に不思議がられる始末でした。

ドイツでは、1,700万haという広大な農地があり、食料の自給率も91%を達成していて、日本とは食と農をとりまく状況に大きな違いはあるものの、私達がドイツに学ぶべきものはまだまだ多いのではないかと、率直に感じたところです。

日本でも、現在、「農地・水・環境保全向上対策」という施策の検討が進められています。農地や農業用水などを守る「共同活動」や「環境にやさしい農業」を行う地域に対して、一定の要件の下で支援を行うというものですが、諸外国の例も参考にして、よりよい施策にしていく必要があると考えています。

ところで、私が、農村をテーマにした歌を作ることがライフワークにしていることをご存じの方も多いかと思いますが、この度、宮城の子ども達の合唱団が、私が作った「ふゆみずたんぼの歌」をCD化してくれることになりました。ライステラスの読者の皆様にも、一度お聴き頂けると嬉しいです。(http://www.jgoose.jp/fyuminizu2/)、歌の試聴が可能です。(国土交通省・シンガポールングライター 田中卓一)

開催日時・テーマが決定!!

■開催日時：2006年10月6日(金)～7日(土)

■開催テーマ：棚田・未来への継承
～人の絆が棚田を創る～

■開催地：宮崎県日南市
総合運動公園多目的体育館ほか

昨年11月29日、第12回全国棚田(千枚田)サミット日南市実行委員会(第2回目)が開かれ、サミット開催日時及び開催テーマが決定しました。詳細は、確定次第お知らせしてまいります。現在、全国棚田サミットを第13回以降も継続させていくため、サミットの内容が検討されています。なお、棚田現地視察は2日目、日南市坂元棚田で行われます。ぜひ、みなさんでふるってご参加ください。

情報

■平成18年度、農村景観・自然環境保全再生パイロット事業(公募方式)が実施されます。

農村の風景を国民共通の資産として維持し守っていくと、農村の景観保全活動や自然再生活動を地域密着で行っているNPO等に直接支援する事業が、農林水産省によって実施されます。行政だけ

でなく、NPO等市民団体の活動を活発化させることも目的で、支援先は公募方式によって決められます。NPO等市民団体が作成した計画案について審査が行われ、そこで選定された活動先に補助金が出るというものです。事業名は「農村景観・自然環境保全再生パイロット事業」。平成18年度～平成22年度の5年間実施されます。詳しくは農林水産省農村振興局地域整備課 中山間整備事業推進室へ。
電話：03-3502-8111(代)

事務局 ニュース

事務局、佐賀県唐津市
からのお知らせコーナ
ーです

新年明けましておめでとうございませう。会員各位におかれましては、新しい年を健やかに迎えになりましたことを心からお慶び申し上げます。

昨年も国内、国外では様々な事件、事故が起こりました。少年少女をめぐる事件、耐震偽造問題、テロ激化、鳥インフルエンザの感染拡大など、今年も引き続き重大な問題となっているものが数多くあります。

このような中、昨年度に決定された世相漢字は「愛」でした。愛知万博「愛・地球博」の成功、紀宮さまのご成婚など、「愛」を育む大切さを感じる一方で、「愛」が無い事件が多発したことが選ばれた理由です。

もちろん、棚田の保全活動も「愛」無くしては続けられません、人々に共感を得ることはできません。今年の第12回棚田サミットは、宮崎県日南市(坂元棚田)で、10月6日～7日の両日に開催されます。テーマは「棚田・未来への継承～人の絆が棚田を創る～」です。絆は、「愛」あってこそより強く結ばれるもの。日南市の会場にて、ぜひ会員の皆さま、そして棚田を守り続ける方々とお会いし、絆を深められればと思います。

さて、昨年末に佐賀県が主催した「ふるさと水と土研修会」に参加しました。研修会では、講師にNPO法人安心院(あじむ)町グリーンツーリズム研究会会長の宮田静一氏を招いての講演がありました。大分県では、県議会が「バカンス法制定を求める意見書」を国に提出するなど、グリーンツーリズムの先進地でもあります。同研究会では、従来の農家宿泊ではなく、農村をメインとした「農村宿泊」として、地域から愛され継続できる「農泊」事業を行っています。

女性が主役で副業の域を出ない(あくまで農業が主)、地域遠元の運動であり、夕食は近くのレストランを利用してもらう(農家が準備するのはベットと朝食だけ)などのルールをつくり事業を展開。リピーターも多いそうです。

以前のサミットでも、「Uターン、イターンですぐに地域に溶け込むのは難しい。まずは、交流体験を重ねることが大事」との意見がありました。しかし、地域が継続して受け入れられるかどうか不安があります。安心院町のような先進事例を参考にしながら、各地にあった事業展開ができれば、と思います。

安心院町グリーンツーリズム研究会ホームページ
<http://www3.coara.or.jp/aimv/>

事務局からのお願い

会員の皆さままで、住所等が変更となる場合は、FAXまたは協議会HPのメール等にて、事務局へご連絡ください。

編集後記

今号の特集はIターン。電話でお話を聞いたのですが、話を聞くなか、棚田地域の心地よい風が耳元から吹いてくるようでした。みなさんの地域のIターン情報をお寄せください。紹介していきたいです。次号は、自治体会員が市町村合併で変更しています。会員数も減っています。そんな状況を踏まえながら、自治体会員紹介をしたいと思います。

なお、今回新たに団体会員になられた株式会社ミツハシさんは、お米屋さんです。HPは<http://www.3284rice.com/top.html>です。のぞいてみてください。
石井里津子

会員募集中

新しく会員になった
みなさま

団体正会員 株式会社ミツハシ(神奈川県)

棚田の保全・中山間地域活性化のための全国組織

全国棚田(千枚田)連絡協議会

お申し込み・お問い合わせは協議会事務局

佐賀県唐津市相知支所産業課

〒849-3201 佐賀県唐津市相知町相知2055-1
TEL:0955-62-2368 FAX:0955-62-2573
協議会HP:<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>